

伝 統 の 力

遠 藤 汪 吉



同志社はやがて九十周年を迎えようとしている。機械的に九十回の周期をくりかえしても九十周年であり、年々成長発展をとげて九十年経るのも九十周年である。後者の意味で九十周年を記念することが意義深くまた祝うべきであることは論をまたない。

人間の生涯でいえば業績とか社会的貢献の度合いをものさしにして、その価値が測定されよう。三十年で偉大な業績をもって社会に貢献した人の生活は、碌々として九十回の馬蹄を重ねた人より意義ある長い生涯を送ったともいえよう。

人間の生涯には併し生物学的な寿命があるから、何を標準にするにしても、これを測ることができる。学校には寿命がない。比較的早く内容が変わったり、消滅するものがある半面、何百年も続いて

いるものもある。そして今後長く存続するであろうと思われるものがたくさんある。したがって学校の良否を簡単に定めることができな。もちろんすべてものが長く続くにはそれだけの存在価値があるからだといえる。

けれども学校は単に物ではない。社会的な生命をもっている。社会的に生命をもっている限りそれは続くともいえよう。しかしこれではあまり他律的である。特殊学校などには一定の社会的要請に答えて作られるものがあり、その必要がなくなればまた改めて看板も内容も変えるものがないではない。

学校がながく続くということは、独自一己の生命力が続くからではないだろうか。このような場合、一般に伝統の力の有無強弱が問

題になるのである。

過去の栄光を記念する銅像、巨大な建造物あるいは物語りが空しく輝いて現在の生命力を疑わしく思わせる国家、社会あるいは学校。私たちは世界の歴史にも、日本の歴史にもあるいは身近にこれらの例証を経験するのである。しかもそこにも伝統を誇る言葉がきかれるのである。伝統とは何であろうか。真に誇るべき伝統の力とは何をいうのであろうか。

「精神的核心または脈絡をもって系統を承け伝えること」と辞書は定義している。たしかに伝統は物を承け伝えるのではなく、精神を伝えるのである。しかし精神を文化と置きかえるとき私たちはしらずしらずに文化遺産の伝承と、その保存尊重の中で後向きな伝統回顧の姿勢に安住しようとしているのに気づく。今の力とならず、思い出の遺品であってはなるまい。

一

秀れた精神的核心が秀れた伝統の力を産みだす。

秀れた核心がなければ、長い年月に耐えて自らそれを持続することができないであろう。

源流が遠く清く高くなければ末は大河の洋々たることを期待することができない。

末流でときに濁ることがあっても、源流が清ければやがて再び清くなる。時として末流が乱れ氾濫することがあっても、源流高ければ常に一貫した強い脈絡を保持して流れを正すことができる。

清い崇高な精神は時代を超えて常にはたらく。それ自身の価値をもつ力である。この精神にはじまる流れはいつまでも形骸に墮する

ことのない伝統の力を長く長く伝えることができよう。

二

秀れた伝統の力は、広い大系を総合するはたらきである。

どのように高く清い流れであっても峡谷を流れる激流に終ることがある。清さと厳しさがあるけれども大河にはならない。多くの水系を集めなされる幅と広さを持ち得ないからである。このような激流はそれ自身価値があり、讃嘆に値する。だが生々発展する性質のものではない。強い生命力は感ぜられるであろうが総合の力をもたない。そこに秀れた伝統が生まれたいというのではない。しかしこの伝統の力を学校の場合にあてはめて考えるとき、どうであろうか。学校は年々新しい人物を送り出し、そして年々新しい人物を迎える。年々交代する人間が常に同一の質をもつことはほとんど不可能に近い。入学試験などの人為的な選抜方法によって人格の一面を同質に保つことはできるかもしれないが、他の面で異質である。

このような事情の下では総合的な伝統の力をもたないならば、自家培養の中毒症状がおこらないと保証できない。さらに自己満足だけの非社会性の人間教育が強制されることになる。

たとえその伝統の精神的核心が如何に純粹であり価値あるものとしても独善の弊を免がれないであろう。

長い年月の間に人も社会も外界の影響を受けずにすまずことはできない。純粹性を保とうとすれば逃避か排他以前にはあるまい。その純粹性が真に価値あるか否か。仮に価値あるとしてもそれは最早外側に対する指導的な力を失なってしまう。

何時いかなる時代にも社会で指導的な立場をもつためには、伝統

の力が大きな体系を綜合するはたらきを持つものでなければならぬであろう。大学が象牙の塔といわれた時代はもうくり返えされることがない。

三

よい伝統の力は新しい生命を創り出す力動的エネルギーをもって
いる。

人類の創造のエネルギーは無限であるか有限であるか知るすべもない。いづれにしてもエネルギーが単に物理的に増大するに止まるならば、それは巨大な破壊力となるか、偉大な建設力となるかの両刃の剣である。伝統の力が自らを破壊することは矛盾であるから、常に創造的な生命を生み出すエネルギーでなければならぬことは自明のことである。

しかしこれだけのほたらきでは伝統の力を永続的に生かすことができない。そのエネルギーが力動的に働くことが大切ではなからうか。

ナポレオン一世の統治した^{フランス}、ヒットラーにひきいられた独逸、ムツソリーニが君臨した^{イタリア}伊太利、そして軍部の指導に委ねたかつての日本。いづれも永い伝統の力を誇り、巨大なエネルギーを、新しい生命を創り出すかみえたはたらきをしたのではないか。だがいづれの場合もそのエネルギーは力動的な柔軟さを欠いていた。一方的な巨大な爆發力となつたけれども、結局は破壊の力に終らざるを得なかつたことはあまりにも新しい歴史の事実であつた。あまりに犠牲の大きなエネルギーの浪費に過ぎなかつた。

よい伝統の力は柔軟なエネルギーが働くのでなければ、創造的な

生命を常に生みだしつづけることができない。

以上伝統の語義に私なりの注解を加えたのであるが、このような観点に立つて、同志社の現状を眺めてみよう。

四

同志社の精神的核心は基督教精神と新島精神であることは新島先生の大学設立の旨意に明瞭であり、同志社に学び、同志社に職をもつすべての者が等しく知るところである。

それが清く崇高なものであることは、また何人にも異議ないところである。同志社はこの精神を、脈絡をもつて承け伝える努力を続けてきたし、また今後もその努力をたやすことがないであろう。

同志社は過去にもなどうか濁流にながされるかみえたことがあつた。あるときには外から、あるときには内から。しかし何時かやがてその濁りを清めて来た。良心的学校の一つ——そしてこのような学校の数が必ずしも多くない現在に——挙げられることは、ここに働く者の誇りとすべきである。そしていまさらのように源流の清さと崇高さが常に底に流れ働いていることを知るのである。そして今後もこれが続くと思つてゐるのは私の樂觀論であらうか。

さきに私は新島精神伝承のために同志社はいろいろの努力をしてゐるといつた。新島研究会、生誕記念講演会、校祖墓参等の行事の他、造品庫、新島会館、新島記念会館等の記念建造物がある。それぞれ有意義で新島精神昂揚のための努力である。もちろん、精神的核心の底流は力としてはたらくのであることを常に忘れないようにしたい。そうでなければ徒らに記念行事や記念物をもって力の現われであるとの錯誤に陥るかもしれない。この気持ちを失なつた行事

は単なるお祭りさわぎであるだろうし、記念物も名にとらわれて実を失った形骸化するおそれがある。

五

新島精神が清く高いものであるだけ、それだけこれを承け伝えるものは常に狭い流れに止まらぬように、広く支流を集め大河に発展させる努力が必要であろう。新島精神にはそのような広さと総合精神が包蔵されていることがもつと強調されてよい。同志社大学には、学問的業績が久しく中絶していた点を嘆く声を聞くことがある。これにはいろいろの事情が指摘されるであろうが、伝統の力を清く厳しく保持することに努力が払われ、広く総合するため人材の集め方なり、学会活動に消極的な観がなかつたかを省りみる必要がある。同志社は全国から学生が集まる点で他の諸大学に比し特色がある。それだけに多くの支流が流れ込んで来ることを思えば、伝統の力を益々広く發揮するように努力工夫することが緊要であると痛感する。同志社で学び生活したことのない人々に新島精神が理解され、また興味を持たれることは同志社の伝統の力の広さを暗示する。今後この点で私たちは積極的な努力をすべきである。人材を社会に送り出す教育面に、学界に訴える研究面に共に力をつくすことが、同志社で教育と研究にあたる私たちの義務と責任である。

六

近來同志社の先輩から、同志社精神、新島精神あるいは校風がうすれたかの声をきくことがしばしばである。もしこれが伝統の力が衰え、生命力を失ないつつあるとの意であれば、同志社の職にある

すべての者の深い反省を必要としよう。校舎がいかに新築改築されようと、同志社を志願する学生生徒が年々四万人を数えても、あるいは年々送り出す卒業生が創設当時の二千倍を超える数に達しよう、それだけでは同志社の発展の証左とはならないのである。

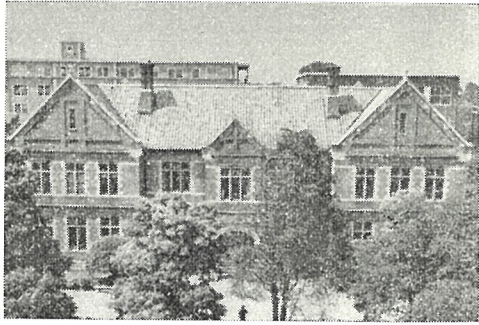
けれども巨大なエネルギーに力動的な生命が脈うつ限り、伝統の力は強くなりこそすれ、うすれることはない。外面的に時としてうすれてみえても、それは必ずしも悲観すべきものではない。しかし実際はどうであろうか。私にとっては先輩の杞憂ではないかと思う。けれども内におけるものは、却って真実を見失なっているかもしれない。また私の樂觀的希望かもしれない。願わくは先輩諸兄姉の声が、この真相を見抜いた上での激励であることを願う。

そして同時に私たちもそれらの声を、自信と謙虚をもつて自戒の資とすることが大切であると思う。

九十周年を眼のあたりにして、あまりに私見を述べすぎた。私が語るべき資格のないことを省りみず長舌を弄した嫌いがあるかもしれない。この貴重な時報の紙面を私有祝するのおしかりを覚悟している。

いずれにしても同志社を愛し、同志社に生活し、同志社の永久の発展を願う者が、自らを上げまし、自らを戒しめる拙文として読み、一つの管見として見逃していただけたら幸甚これに過ぎるものはない。

(学生部長、文学部教授心理学)



工学部の学科増設

星 名 秦

新島襄先生が国禁を犯して国を出奔し、米国に渡られたのは齡僅かに二十二歳のときであった。時恰かも開国を迫る諸外国がわが国に圧迫を加え、それに抗して武器をとるということで、物情騒然たるものがあつた。彼は鉄製汽船を操り大砲鉄砲を用い、われは木造帆船と刀槍とで対抗したものであつた。

青年新島襄はその様を見て、なんとしても彼の技術を学びとり、わが国の文明進歩を計らなければならぬと決意して、敢えて国を出たのである。滯米中キリスト教の偉大なる感化をうけ、その道を究めるとともに、理学士としてアーモスト大学を卒業し、帰国するや

キリスト教主義による大学教育をはじめんとせられたのは、周知のことである。

明治二十三年理科学館を米人ハリス氏の寄付により設立し、待望の理科教育をわが国ではじめて実施したのである。実に七十有余年前、わが同志社は他に先んじて理工科教育に先鞭をつけたのであつた。しかし途中惜しくも中絶したが、昭和十九年に至り工業専門学校として再開され、昭和二十四年には新制同志社大学工学部として発足したのである。爾來年と共にその内容も充実し、さらに今年からは在来の電気、機械工学、工業化学の三科に、電子工学、第二機械工学、化学工学の三学科を加え、合計六学科の大工学部として理工科教育を一段と推進して行くことになつたのである。なお、この工学部には大学院をおき、電気工学、機械工学、工業化学の各専攻を設け、修士課程と博士課程の高度の工科教育も行なつており、まさに名実ともに備わつた学部といふことができる。

しかしながら総合大学われらの同志社にあって、自然科学系列をうけもつ工学部は、前記のように電気、機械、化学の三部門のみであつて、土木、建築、採鉱、冶金あるいは航空、原子力といった工学部門を欠き、さらに工学以外の理学、医学、農学等の分野も欠いている。誠に不本意な現状ではあるが、これらの部門を新設充実することはなお将来のこととして、現在の三工学部門については、教授陣容および施設設備は年々充実、整備し、それぞれ立派な研究が次々と発表され、世人の注目をうけるまでになり、また年々卒業する学生はほとんど会社に、研究部面に吸収され、その声価も極めて高いものがある。

電気部門二学科の一つである電気工学科においては、電気工学の基礎および応用に関する教育を行なうもので、このため電気一般の基礎理論を十二分に修得するとともに、電気計測、電気機器、電力工学のほか、応用電気工学等を重点的に履習する。これに対し、新設の電子工学科においては、最近の電子工業技術の飛躍的な進歩に即応して、電子工業を専門的に教育せんとするもので、このためまず数学、物理学等の基礎科目に相当の時間をかけて履習させる。この上で電子計測、電子回路、超高周波工学、あるいは固体電子工学等の専門領域を十分に修得させる。これによってこの方面の新技術の開発に適應する能力を与えんとするものである。

機械部門は前述のように、従来の機械工学科と新設の第二学科となつてゐる。前者では主として機械工学に関する一般応用方面に重点がおかれるのに対し、後者の第二学科では主として機械工学の基礎学科の修得に重点がおかれる。したがって前者においては、材料、流体、熱などに関する力学をまず学習し、これに基づいて各種機械の設計や製作法を学び、また製図および機械実習や実験などを行なう。これによって将来主として設計の実務や生産技術、営業などに直接従事する者を育成することを目標としている。これに対し後者の第二学科では、研究や企画、設計などに従事する者を養成することを主眼としている。したがってこの方面の新分野の開発と発展に特に関心と熱意を有する者にはこの第二学科が適しているといえる。最近工業界において高温、高圧、高速化の問題が注目されつつあり、また製造工程におけるオートメーションの普及が必至である現在、これらに関する講義や実験が課せられている。

次に、化学部門は工業化学科と化学工学の二科に分れるが、時としてこの二科は混同されやすい。工業化学科ではまず基礎として、無機化学、有機化学を学び、物理化学、分析化学の講義と実験を履習する。続いて無機および有機化学工業の各部門に関する専門科目の講義および実験を必修する。これによって化学工場における有能な技術者および新しい領域を開発する研究者を育成せんとするものである。これに対して化学工学科では、新しい化学生産のための条件を探究し、新しい化学プロセスの開発と確立を目標とする。このために数十万におよぶ化学物質をいくつかの物性に則つて分類し、一方これらを処理する操作も数種に類別して、ひろく物質と操作または装置との関係を解析的に把握し、それぞれの場合について最適の操作条件を求める方法をとる。これを実行するためには、物性に關してだけでなく、操作、装置の基本型に関する知識が必要であり、また新しい装置を考案する能力を養わねばならない。前述の四種の基礎化学を必修した上、主要専門科目として操作、熱力学、化学計測、反応工学、および工業化学科の専門科目の大部分を履習することになつてゐる。

わが同志社に來り、わが工学部に学ぶものは、よくその使命目的を理解し自覚し、存分に若人の氣力を發揮して、能うかぎり知能の啓発に努めんことを望むと同時に、われわれ教員もまた、誠心誠意その助長育成に全力を傾注し、もつて創立者新島襄先生の祈願の実現に邁進せんことを期している次第である。

(工学部長、教授 熱原動機)



暫し白墨と別れる

高 橋 勤

茂校長先生がご停年になり昨年八月三十一日付で退任された。後任として浅学菲才の私とその重責を受け継ぐことになった。その就任の挨拶で次のような感想めいたこと（公約？）をのべた。生徒諸君にである。

(一) 「良き先生は生徒のために生命をすつ」ができそうもないこと。

二十数年前、同志社中学校に就職したと

き、彰栄館の扉にかかっていた「良き羊飼は羊のために生命をすつ」というヨハネ伝の聖句を中堀先生が示して「高橋さん、同志社教師の第一資格です。第二は生徒を信頼することです」とおっしゃった。爾来私の心を離れぬ聖句である。しかし悲しいかな、私には全く自信がない。事の次第は次のとおりである。その年、はじめて生徒諸君と由良海岸にキャンプに行った。風の荒い日で海はしけていた。沖への遠出の禁を破って数人の生徒が出た。その中の一人が溺れはじめた。私は多少泳ぎに自信もあって、すはとばかり救助に向った。大変苦しかったことを今もって覚えている。漸く救い出した途端、大波が今度は私の体をすくった。あつ、というまもなく私は疲れはてて沈んでしまった。そのほんの一瞬間であつたが「このまま死んでは阿呆くさいな。禁を破つた生徒のために」と思った。やがて五年生の屈強な若者二、三人にかつがれて漸く危機を脱した。もしもあるとき私が死んでいたら私のほんとうの心状をしらず、世間の人びとは「嗚呼、高橋教諭生徒のために生命をすつ」と新聞記事にでもしてほめたたえたことだろう。以来今日まで私はそのと

きの一瞬持つたその気持に赤面し続けてきている。今度このような事態に遭遇したら「今度は大丈夫」と決心はするが「ほんとな」という気持ちの方が片方からすぐ湧いてくる。若いころ「うちの校長話せる男、生徒のためなら死ぬという、ヨイ、ヨイ、デカンショ」と歌つたが、私にはたしてできることやら「主よ試みにあわせず悪より救い出し給え」と祈らずにはおられない。

(二) 貫禄のないこと。

長と名のつくものには貫禄がつくそうである。否、心がけてつけるものだそうである。しかし私はこれがいやである。同志社高校の校長には貫禄なんて不必要だ。ことに私のように人並み以上に坐高があり、足の短い不細工な男に貫禄なんてつくものか。つける努力なんかナンセンスである。大切なことは諸君一人、一人が同志社高校生としての貫禄をつけることである。それは諸君の個人、個人の自らの苦闘と体験によってのみ培かわれるもので、諸君に貫禄がつけばその後でやがてやつと私に貫禄がついてくる。私の貫禄はそういうものでありたいと願っている。そして諸君の真剣な反省と思索を期待する。

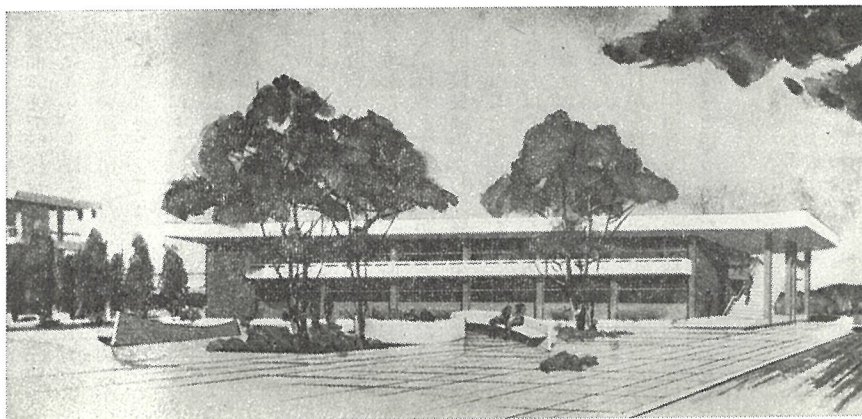
(㊦) おめでたい校長であること。

今度の方より「おめでとう」といわれ
て全く困ってしまった。高校の校長がそんな
におめでたいものに値するかどうか。事情を
知っている人は「ごくろうさま」といつてく
ださる。ところが古い先輩より次のような祝
電を送って頂いた。「おめでたい勘氏が校長
になった。これがほんとうにおめでたい。」
私は実のところほっとした。同志社の校長は
生徒に誤摩化され、だまされる善良さがな
かったら、おめでたさがなかったら、ひからび
たものになる。私はおめでたい校長になりた
い。

さて、校長稼業をして七ヵ月、その多忙さ
には「恐れ入りました」授業もぐんとへり八
時間持ちになったが二、三度遅刻もし、ブラ
ンクも作ってしまったが残念至極である。それ
よりも自分の性格もあって忙しく立ち働いて
いると授業がおろそかになり、生徒諸君への
影響は倍加して悪化する。そこで四月よりは
いよいよ授業を持たぬ決心をした。これは高
校の先生の生命を奪うことになってしまうの
で一生懸命に考えあぐんだ末の仲々の決心で
ある。しかも四ヵ年間も続くのだ。いよいよ

三月に入り最後の授業の時間、私は次のよう
に生徒諸君に訴えた「今から四年間、教壇に
は立たない。諸君を教えるのが一つの区切り
としての最後である。私に對し何か要求し激
励することがあれば何でもよい。思い切つて
書いてくれないか。ただし意見を發表すると
きは何時でも堂々と發表するものであるから
当然名前は、はっきりと書くこと」二、三十
分考えて書いてくれた多くは「校長をやめて
数学を教える方が勘先生らしくて先生の柄に
適している。柄にもない校長なんかやめろ」
というのが断然多かった。その二、三は次の
ようなものであった。

一年S嬢 「高橋勘は寛容にして慈悲あ
り、勘はねたます、勘はほこらず高ぶらず、
非礼を行なわず、人の悪を思わず、不義を喜
こばずして真理の喜ぶところを喜び、お
およそ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事
望み、おおよそ事耐うるなり」(聖書コリン
ト) というような高橋勘先生ではない。こん
な先生だと人間ではない。幸い先生も人の子
であり、短期間だったが、楽しく過し得たこと
は何をかくそう私たちも先生も人間だったか
らである。「人間」という映画が来たとき、



同志社高校・柏心館

われわれに人間の限界を見せた映画であると
か先生はおっしゃっていた。先生の感想をゆ
つくり聞きたいものだが、もう授業しないと
なればこんな話も聞けなくなる、一体これ
よいものだろうか。

一年T君「我ものの心知れしより十六余
りの春秋を送れる間に同志社高校の不思議を
見ることや度々になりぬ。いんし昭和三十
八年如月二十八日かとよ、勘公烈しく怒りて
静かならざりし時、一時間ばかり一Fの授業
態度より怒り爆発して逆鱗に至る。はてに大
石、阿部、山田、横江など男女を問わず、怒
り移りて一時間の間に二十人余り立つことに
なりき。火元は津田のインデアン刈りとか
や。遠き人は笑いにむせび、近きあたりはひ
たすら髪の毛を吹きつけたり。風に堪えず吹
き飛されたるフケ、飛ぶが如くにして一、二
米を越えつつ移りゆく。そのフケがかりたる
人、うつし心あらむや（「や」は反語の終助
詞……であろうか、いやそうではないの意）
人の営み、みな愚かなる中にさしも危きギヤ
ンプルをするとして金を費やし、心を悩ますこ
とはすぐれてあじきなくぞ待る」と師の君の
勘公のたまいたり。（鴨長明方丈記安之の大

火による）先生もうこんな思い出が作れなく
なりますね。

一年H嬢「雨ニモマケズ、風ニモマケ
ズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ、校長ノイッ
ガシサニモマケズ、イツモ学校ニ来テイル、
生徒ヲ矢ノヨウニ早クアテ、東ニ答ノイエヌ
モノアレバ（立テ）、西ニヤジヲトバスマノア
レバ（アホーデアアル）、廊下ニサワグモノアレ
バ矢ノヨウニ走りツツ（悪イ奴ダ）、教室ニ紙
クズガアレバ（誰ガシタ）ト一ツノコラズヒ
ロワセテ（立ツトレ）、南ニ血気サカナン若者
アレバ（話ンアオウ）、ト若者ノキモチ、ソウ
イウモノニ先生ハナツテイタ」（賢治詩集よ
り）はげしい情熱と正義と愛情とほんの申し
訳けみたいな信仰をチョッピリお持ちです
ね。先生に習えなくなつて本当に残念です。
校長をやめてくださいませんか。

いよいよ、私は四月より教壇を去り白墨を
持たない生活を四年間続けることになる。高
校教師が生徒と直接に接することから離れる
生活を思うと慄然とするが、多忙のため十
分な授業をすることはさらに危険で、生徒諸
君に対して申し訳けのないことである。現在
の校長職が知徳体を把握して教育行政から経

営面にまで学校全般に亘り細心の注意をもつ
て見守り、大局に立ち最高決議機関である教
員会議の決定にしたがってより適切にかつ機
敏に処置をとることは、とても、とても、で
きそうにもない。いきおい授業も持てなくな
る。校長職がこんなに多忙であることに対
し、本部当局も十分考えて、対策を練ってい
ただきたい（校長手当では断然ない）。せめて
私が永年、主張し続けている独立採算制でも
破り得たらと思うのだが、どうだろうか。
そうしたらせめて二、三時間でも授業がもて
て、ほつとするのだが、と思つたりする。戦
前、校長は物々しい修身をやらせられたが、
あんなことが復活したら、さっさと校長職を
おさらばして、それを雨ニモマケズ、風ニ
モマケズ生徒と泥んこになつて白墨を持つ生
活にかえることだろう。

四月から私の手はチョークで荒れぬ手とな
る。一年過ぎて、じつと私の手の平を見て、
私はなんと思うことだろう。（高校校長）